
15歳のクリスマス

あいぼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

15歳のクリスマス

【Nコード】

N3193B

【作者名】

あいぽ

【あらすじ】

3年前のクリスマスに交した幼き日の『永遠の恋』の約束。今夜がいよいよ約束のクリスマス。甘く切ない初恋が、聖なる夜に『究極の愛』に今変わろうとする！

前編

なあ、水嶋…

僕はこの日に誓うよ…

おじいちゃんとおばあちゃんになっても…

ずっと僕らは一緒だよ…

そして…

水嶋の事ずっとずっといつまでも大好きだから…

っておい…水嶋…

聞してるか？

どうしたんだよ。

はは…何泣いてんだよ。

今日は…

クリスマスなんだよ…

目を閉じれば今も思い出す。

二人で交わした3年前の約束。

岡田君の優しい眼差し、優しい声、そして私より背の高く少し日焼けした肌。

3年前のクリスマスのあの日…

私たちは永遠の恋を誓った…

高岡駅のターミナルには、大きな大きなクリスマスツリーが輝いていて、赤や青の幾重もの光を放ち、空から舞う雪を幻想的に彩っていた。街には静かにクリスマスソングが響き、私たちは、まるで昔観たデイズ二ーの映画の中の主人公のようだった。

15歳の私の生まれて初めての恋だった…

中学に入学してから、ますます人見知りが強くなった私は、クラスにほとんど話し相手のいなかった。だけど…岡田君だけは違ったね。くつたくな笑い顔でいつもジョークを飛ばし、私を笑わせてくれたよね。あの時、岡田君はクラスで私が話せる唯一のお友達だったんだよ。

だけど…

気がつけば恋をしていたんだ…

1年生の時に出逢った恋は、笑ったり泣いたりしながら、3年生の夏に叶ったね。サッカーが大好きで、いつもグラウンドを駆けていた岡田君…。少しぶつきらばうなところや、困ったようにはにかんだ笑顔好きだった。

『花火大会に行こう』

3年生の夏休み、中学最後の思い出からって…一生懸命誘ってくれたよね。

私は顔が真っ赤になって、思わず走って逃げてしまったけど、ホントはすごく嬉しかったんだ。目には涙が溢れて…。だけど、どうしたらいいか分からなくなった私は気がつけば、走っていた…

そんな私を、一生懸命追いかけてくれて、

『水嶋が好きやから…』

って、そつと私の右手を掴んでくれたよね。

落ちてゆく夕日に照らされて、岡田君の少し焼けた素肌が眩しかった…。嬉しい気持ちと岡田君の優しさに、涙が溢れてとまらなかった。あの時、しゃがみこんで、ずっとずっと泣いてた私の右手を何も言わずずっと握っててくれたよね。

いつも泣いてばかりで困らせてごめんね。

そして、いつも私を見守ってくれてありがとう。

岡田君が大好きで大好きでしうがなかった…

どんなに言葉を集めても、足りないくらいに大好きだった。

二人で出かけた花火大会…もうすぐ最後の夏も終りだねって、二人でずっと手をつないで眺めてた天晴しの海…秋の遠足で登った二子山。二人で抜け出して先生と一緒に怒らた事もあったよね…何もかもがキラキラしていた毎日だった。

そう…

あの時までには…

『パパとママ東京で仕事することになったから…4月には東京に行くから…東京の高校の願書取り寄せたから見ときなさい…』

突然の出来事だった。普段は仕事仕事で忙しいパパとママが、久しぶり私に声をかけた言葉がそれだった。
私は泣いた。

ずっとずっと泣いた。
学校も何日か休んでしまった。
心配した岡田君が、毎日お見舞いに来てくれたけど逢えなかった。

岡田君の声を聞いたら…

岡田君の笑顔を見たら…

私の心は壊れそうだった。
毎日が辛かった。岡田君に逢いたい。でも逢いたくない。来年の4月にはどうせ離れ離れになるんだからと、私は岡田君を忘れようとした。

二人の恋に明日はない…

忘れる事が二人のためだと思った。

岡田君…一緒の高校に進学しようって、すごく勉強頑張ってたのに…。

それから…私はますます殻にこもった。繰り返される毎日に、私に

は意味がなかった…クラスでも誰とも口をきいてない…岡田君とも…悲しい恋に終りを告げるため、無視して殻に閉じ籠ることしかできない私だった。

『水嶋はサイテー女やちゃ。岡田の気持ち知ってるのに、全然口を開らんねか。マジサイテー女やちゃ』

サッカー部の誰かが言っていた…クラスのみんなにもうわさになっていた。
だけど、何を言われても平気だった。来年の春、岡田君と離れ離れになると思う方が、心が痛かった。

けど…

岡田君は…

ホントに優しかったね…

私は、東京の高校を受験する事や引っ越しをする事は誰にも言っていなかったのに…そっか…先生に聞いたのかな。明日から冬休みっていう2学期の終業式が終わったあと…

『最後に伝えたい事があるから今日の夜…高岡駅で待ってるから…

水嶋が来なくてもずっとずっと待ってるから…』

私に真剣に話してくれたね。今まで知ってる岡田君とは全く違う真剣な表情で…。

そして…

中学生生活最後の3年前のクリスマスのあの夜…

岡田君は高岡駅で約束してくれた…

「おじいちゃんとおばあちゃんになっても水嶋が好き」

「来年の春にはお互い離れ離れになるけど、今はまだ二人は世間から見たら子供やし…とにかくまずは高校を卒業しよう。だから今はお互いきちんと自分で大人になったって自信が持って言えるように頑張つて、3年後の高校最後のクリスマスにもう一度ここで逢おう。その時が、ボクらのスタートだよ。」

岡田君は、そつと私に金色のリングを渡してくれた…

とっても華奢で、今にも折れ曲がってしまいそうなリングだったけ

ど、そこには岡田君の大きな愛と優しさがたくさんたくさん詰まっ
ていて、空から舞う雪と、鮮やかクリスマスツリーの光の中で輝き
を放ち、私の心にもそっと灯を与えてくれた。

3月…

中学を卒業して、私は岡田君とめぐり逢えた大好きな富山から、東
京へ旅立った…

そして

2006年12月

いよいよ、今日約束の日が来た。

私は羽田空港へ向かうモノレールの中、岡田君との再会に胸を弾ま
せ、左手の岡田君に貰ったリングをずっと眺めていた…

今夜岡田君に逢える！！

東京の空からは、この時期珍しく雪が舞い降りてきていた。それは
まるで今夜の二人のスタートと一緒に喜びはしゃいでいる天使たち
が落とした、キラキラ輝く羽のようだった。

前編（後書き）

こんばんわ。

あいぽです。

クリスマスのこの日に読んでくれてありがとうございました。
あいぽが描くクリスマスの恋物語。

思ったより長くなり、前編と後編にわけました。

感動のラストは、明日25日の夕方更新します。

読んで頂いた皆様が最高のクリスマスが訪れますように…

H a p p y M e r r y X · m a s

2006・12・24

あいぽ

後編

富山へ向かう飛行機の中、ANAの機内放送ではクリスマスの音楽特集を組んでいた。ヘッドホンをそつと耳にあて、チャンネルを合わせ、機内から流れるクリスマスの音楽に耳をかたむけた。私を乗せた飛行機は、粉雪舞う上空に静かに飛び立った。

富山へ向かう飛行機の中、私は岡田君と離れた東京での高校生活を振り返っていた…

最初の高校1年生のクリスマスの夜。岡田君から電話を貰った。

『メリークリスマス。水嶋元気にしてる！？こっちは今年の雪はスゴイよ。次の次のクリスマスに逢えるね。』

高校2年生のクリスマスの夜も電話を貰った。

『メリークリスマス。水嶋：ボク卒業したら働く事に決めたよ。早く社会に出て一人前の男になって水嶋を迎えに行くからね！いよいよ来年逢えるね。水嶋は卒業後は進学かな？』

岡田君の声：少し大人っぽくなっていた。世間で言う『大人』に少し近付いたのかな。

私は『大人』になるため、進学する事にしたよ。私は学校の先生になるんだ。学校の先生になったら自信をもって立派な大人だって言えるかな。この時期からは、とにかく受験勉強に明け暮れていたな。

高校3年生の夏…

同窓会があった。

私は大学受験の夏期講習が忙しく、参加はできなかった。

岡田君に逢いたいけど、二人が大人になったらいつばい逢える…だから進学のための勉強に集中した。

夏の終りに、サッカー部だった岡田君の友達から連絡があった。

『水嶋あ、岡田が高校中退したらしいけど、なんか聞いてないけえ？アイツ同窓会にも顔出さなかったし…水嶋ならなんか知ってるかなって思っ…』

岡田君が中退！？

私は戸惑った。

そういえば、2回目のクリスマス以降、いつもくれていた岡田君から電話は一度もなかった。

岡田君も忙しいんだろうと思ひ込み、こちらからは電話しなかったけど、その日、岡田君に電話してみた

『お客様のおかげになった電話は使われておりません』

無機質なアナウンスだけが流れた。少し不安になった。だけど、いつも優しかった岡田君がどこかへ消える訳や約束を忘れる訳はない。私は自分に無理矢理言い聞かせ、受験勉強に集中し、約束のクリスマス

マスを待った。

富山空港についた私は、高岡駅までのバスに乗った。高岡駅までのバスから見える景色の何もかもが懐かしかった。岡田君と別れてからの寂しさが一気にこみあげ自然と私は涙に溢れていた。

高岡駅に着いた。

駅前のバスターミナルには3年前と変わらず大きな大きなクリスマスツリーが輝やいていた。街にはクリスマスソングが流れて、駅を行き交うカップルたちは、手をつなぎ笑顔に溢れて幸せそうだった。

私は自分の右手を見つめた。

岡田君の左手いつもあつたかかったな…。

今日は、昔みたいにならずと私の右手を握っていて欲しいな…

日も落ちてきて、街はイルミネーションで、益々華やかに煌めき、行き交う人も増えてきた。あの日と同じように、空からは幻想的に雪が降りてきていた。

その時

岡田君…

人混みの中、遠くからこちらに近付く人影はまぎれもなく岡田君だった。日に焼けた素肌が懐かしい。

やっぱり来てくれたんだ！！

私はそっと右手を差し出し、3年間の想いを一気に口にした。

「逢いたかったよ…」

瞬間…

何が起こったか分からなかった…

どうして…

なんで…

岡田君には私の事が見えてないかのように私の右側を通りすぎていった…

振り返えると…

その後ろに私たちより少し大人っぽい感じの女性と手をつなぎ楽しそうにお喋りしながら歩いていった。

『岡田は、高校3年生の夏に、教育実習に来ていた先生に惚れてしまったちゃ。舞い上がってしまつてや…高校辞めて働いて、先生と結婚するゆつてきかんちゃ。』

私は、秋頃にサッカー部の友達からかかってきた電話を思い出した。絶対ウソだと信じてたのに…

ホントだつたんだ…

ねえ岡田君…

私はどうすればいいの…

ずっとずっと岡田君の事だけ考えて3年間頑張ってきたんだよ。

『永遠』なんて言葉ないのは分かっていた…
だけど、岡田君とだけは『永遠』があると思っていた。

ねえズルイよ…岡田君…

守れないなら、なんで『永遠』なんて約束するの!?

私は雪の中崩れ落ちた。頬にあたる雪が冷たかった…

雪の中に消えてゆきたい

真剣に考えた。

煌めく街の中に私だけが一人だった。

クリスマスはみんなみんな幸せになれるんじゃないの…!?

やっぱりサンタさんなんていないのかな…

独り空から降りてくる雪を見上げながら、これ以上ない悲しみうちひしがれていると…

えっ…

夜空が少し虹色に輝き、遠くから鈴の音が聞こえてきた…

これは現実！？夢！？

空からトナカイがひくソリにのってサンタクロースがやってきた。

「どうした？少女よ。今日はクリスマスじゃ。涙は似合わない。お前さんの願いを叶えてやろう」

暖かい光に包まれ私は『岡田君と付き合いたい』との思いの全てをサンタクロースにぶつけた。

「ふむ。さすがにワシとて、人の気持ちを变える事はできん。」

「じゃあ！！岡田君との思い出を全部消して！！岡田君との約束さえなければ、私はこの3年間もつと他に恋をして幸せだったかもしれない！！もうイヤ！！岡田君なんて忘れてしまいたい！！私のこの3年間を返してよ！！」

岡田君への恋がいつしか憎しみへ変わっていた。

「まあそうカリカリするなよ、お前さん。忘れたいかあ……」

「そうじゃ！！それならお前さんを今から3年前に戻してやろう。その約束の日に別れてくるのじゃ。なら、お前さんの記憶から、その男の子の思い出全て消してやろう！」

いきなり空から天使が降りて来て私の両肩をつまみあげ、サンタクロースの乗ったソリにのせた。
ソリはいきなり空高く舞い上がり……

気がつけば……

目の前に岡田君がいた……

なあ水嶋…

ボクはこの日に誓うよ…

おじいちゃんとおばあちゃんになっても…

ずっとボクらは一緒だよ…

そして…

水嶋の事ずっとずっといつまでも大好きだから…

「ほれ…お前さんの好きな岡田君とやらに、ここで別れを告げるのじゃ。そしたら、新しいお前さんの3年間が待ってるんじゃないぞ」

後ろからサンタクロースの声かした。

私は懐かしい岡田君の声に涙が溢れて止まらなかった…

ウソについて私の3年間で台無しにした岡田君がさっきまで憎くて

しよがなかつたけど…

やっぱり忘れるなんて無理だよ…

岡田君との想い出が走馬灯のように蘇る…

例え3年後、私の恋が叶わないとしても、やっぱり岡田君の記憶を消したくない…

3年間…

離れ離れになり、ただ岡田君を想うだけの恋だったかもしれない。だけど、確かにそれはそれで幸せだった…

思わず泣きくずれてしゃがみこんでしまった。

ははっ…何泣いてんだよ。

今日は…

クリスマスなんだよ…

3年後のクリスマスの夜…

もう一度ここで逢って欲しい…

泣き崩れる私の頭をくしゃくしゃとなで、そっと私に金色のリングを渡してくれた。

「岡田君好きだよ…3年後またここで逢おう！」

例え叶わぬ恋だったとしても、やっぱり岡田君を忘れることなんてできない。私は岡田君と約束した。

後ろではサンタクロースが私に微笑んでいた。

「さあ！！出発じゃ！！」

サンタクロースの声とともに、天使が私をソリにのせ、粉雪が輝く夜空にまた飛び立った。

サンタクロースは優しく私に語ってくれた。

お前さん…

よく頑張ったな…

お前さんの選んだ道は正しい。もしお前さんがここで別れを告げたらワシはお前さんをもう二度と恋が出来ぬ心にするつもりじゃった…だが、お前さんは裏切った男の子を許し、それでもなお愛そうとした。

恋とは儚いものじゃ…

それは、誰もが気軽に好きになりキライになってゆくからじゃ…

だが、愛とは永遠じゃ…誰かの事を永遠に想い続ける事が愛なのじゃ…

お前さんの恋は叶わなかったかもしれない。だが、お前さんは『愛』という素晴らしいものを手に入れたんじゃ。

これは、この先お前さんの人生という長い道の中で、きっと力強い味方になってくれるじやろう。

ほれ…最後にプレゼントじゃ…

海！？

気がつけば、私は岡田君と昔二人でみた海の前で座っていた…

粉雪たちが海に落ちてゆく姿はとてもキレイだった。

悲しみも切なさも舞い降りてくる粉雪のようにな、海にとけてゆくような気がした。

サントさんが言った通り、私の恋は叶わなかったけど、岡田君を好きになった事だけは、ずっとずっと大切にしよう。そして、心の奥で、いつまでも愛し続けよう。

だって、岡田君との思い出は、私にとってかけがえのないたったひとつの場所だから…

後編（後書き）

こんばんわ。

あいぽです。

クリスマスに向けての読み切りという事で、クリスマスに間に合うように書き下ろした作品ですが、実はコレ…あいぽが初めて一つの作品を完結させた記念すべき処女作品なんです！！

今は、初めて作品を作れた事の喜びと、読んでくださった方からの暖かい評価で感無量の心境です。

作品が出来上がるまでに、支えてくれた仲間には心より感謝いたします。

一応解説をつけさせていただきます。

カンが鋭い方はお分かりだと思いますが、実はこの作品はあいぽが大好きな川嶋あいさんのある歌の世界観を表現してみました。

「さよなら」「ありがとう」「たったひとつの場所」

「さよなら」と「ありがとう」の気持ちを

永遠の心にしまった

やがてあびる朝の光

涙消してくれる

海に落ちていく粉雪たちよ

切ないね悲しすぎるから

消えていった私の恋

帰れない場所へ

いつまでも心にある

たった一つの場所

これからも…

読んでくださった方の心が暖かくなったり、優しい気持ちになれるような作品を作って行きたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3193b/>

15歳のクリスマス

2010年10月11日15時39分発行